コミュニケーションの記録をとってみましょう

1. はじめに(なぜコミュニケーション記録に意味があるのか)

　コミュニケーションの記録をとってみると，子どもが今どのような方法でコミュニケーションしようとしているのかがよくわかります。子どもたちのなかには，クレーン（人の手を引っ張る等）で表現したり，直接行動（直接ものに手を伸ばすなど）で表現したりしている子どももいるはずです。このような方法は、時と場合によっては、周囲の人たちには，受け入れられないような行動になってしまっているかもしれません。しかし，それは，故意に人を困らせようとしているのではなく、人に意思を伝えるための適切なコミュニケーションの方法を知らないことが原因であることが多いと考えられるのです。

　ちょっと考えて見ましょう。ことばがうまく通じない国に滞在することになったとしましょう。私たちは、相手から何を言われているのかわからなかったときには、両手を広げて首をかしげるという行動をすることがあります。この行動には，「言われていることがよくわかりません」という意味があるのですが，その国では，この行動には「トイレに連れて行って欲しい」という意味があったとしましょう。私たちは、その国の人に話しかけられても、何を言われているのかがわからないので、手を広げ、首をかしげ、「分からない」ということを表現します。すると、そのたびに、その人にトイレに案内されることになってしまうのです。私たちは「トイレじゃないのになぜ？トイレに連れて行かれるのだろう」と思い，その国の人たちは「この人は，何度もトイレに行きたいと繰り返す変わった人だ。」と思うでしょう。何度も何度も繰り返されるとすると、その国の人は、「すぐにトイレに逃げ込む、問題行動のある人だ」と思うかもしれません。また、このようなことが長く続くと、私たちは相手の顔も見ないようになっていくのではないでしょうか。視線回避の状況が起こってしまうのです。

日頃何気なく行っているやりとりを振り返ってみましょう。このようなことが子どもたちとのやりとりのなかで起こっている可能性はないでしょうか？適切な表現の仕方を知っていたらこのようなことにはならないのに、相手に通じないような方法で表現してしまうからこのようなことになってしまうのです。このようなすれ違いを起こさないようにすることはできないものでしょうか。

もし子どもたちとの間で，上記のようなすれ違いが起こっているとしたらどうすればいいのでしょうか？このようなすれ違いは，適切なコミュニケーション方法を身につけることができれば解決するのではないでしょうか？何とか表現の方法を相手に伝わるようなものにすることができれば、少し改善することができれば，子どもたちとの間でもっと楽しくやりとりすることができるようになるはずです。

では、どのような手順で、適切なコミュニケーションの方法の提案をしていけばいいのでしょうか？コミュニケーションの方法を提案していくためには、まず、子どもが今，どのような方法でコミュニケーションしているのかを知ることから始めることが大切です。今、どのような方法でコミュニケーションしているのかわかれば、コミュニケーションの練習をする場面を考えることができるからです。子どもがどのような場面で，どのような方法で，どのようなことについてコミュニケーションしようとしているのかを知ることができれば，コミュニケーションの指導をする際の目標も明確になります。ですから、まず、子どもとの間で行われているコミュニケーションの実態を知ることが大切になるのです。

その実態を考慮しながら子どもとの間のコミュニケーション方法や手段について，子どもにストレスをかけすぎることなく指導するための方法を考えていくのです。

適切なコミュニケーション手段を身につけ、それを使ってコミュニケーションできるようになると，子どもたちの姿が変わります。それは，今までよりも伝わりやすくなり、コミュニケーションすることによって課題を解決したり、要求したものを手に入れたりすることができるようになるからです。つまり、コミュニケーションできることの楽しさや、その便利さに気がつくようになり、その結果、今まで行っていた不適切なコミュニケーションの方法は使わなくなっていくということです。

ここでは、子どものコミュニケーションの実態を知る方法のひとつとして、コミュニケーションの記録をとってみることにします。そして、その子どものコミュニケーションの力を知り、適切な指導目標を立てることで、子どもたちからの自発的なコミュニケーションが引き出し、その方法が周囲の人に受け入れられやすいものになるように工夫していきたいと思います。ここで参考にしているのは、アメリカのノースカロライナで行われているTEACCHプログラムのコミュニケーションサンプルです。

2. コミュニケーション記録のとり方（用紙1）

　コミュニケーションの記録は，そんなに難しいものではありません。どのような自発的なコミュニケーションがあるのかを観察して記録するだけの単純なものです。

用紙1にはいくつかの項目があります。そこに，書き込んでいくのです。ここに書き込んでいく上で注意しなければならないことは，子どもの自発的な表現を記録することです。そして，はっきりとわかるものを記録していきましょう。わかりにくいものは記録する必要はありません。明らかにわかるものだけを記録していくようにします。どうしても自発的なコミュニケーションの回数が少ない場合は，コミュニケーションする場面を作る必要があるかもしれません。例えば、大好きな缶ジュースのふたを開けないで渡してみます。缶のふたを開けてほしいということをどのような方法で表現するだろうか？大好きなカレーを食べるときにスプーンがないときには、どのような方法でスプーンを要求するのだろうかというようなことをみていくわけです。このような注意点を意識して，記録をとっていきましょう。

2.1 記録

では、具体的に記録をしていきましょう。

どのような場面で伝えてきたのかを記録しましょう。食事のときでしょうか？おやつのときでしょうか？それともビデオを見たいときでしょうか？どのような場面で自発的なコミュニケーションが見られたのかを記録します。

次の欄には，それは，どのような方法だったのかということを記録します。お母さんの手を引っ張っていった（クレーン）とか，お茶碗を差し出したとかといったことです。ここでは、具体的な行動を記録していきます。

次に機能です。ここではその行動の機能を「要求」と「注意喚起」と「拒否」，「その他」に分けています。「要求」は何かをしてほしいときや，何かがほしいときにしている行動のことです。「注意喚起」は「お父さん」，「お母さん」といった呼びかけにあたるものです。「拒否」は「いやだ」という表現です。子どもたちのなかには、これらを、奇声を発することによって表現したり、周囲の人を叩くといった方法で表現したりしている子どもがいるかもしれません。「その他」は挨拶などです。「おはよう」や「おやすみなさい」，「さようなら」などがそれにあたります。よく観察して記録していきましょう。

　次に場所を記入します。そのコミュニケーション行動が起こったのはどこなのかということです。もし、特定の場所でコミュニケーション行動がよく見られるのであれば、その場所にコミュニケーション行動を引き出すための、ヒントが隠されているかもしれないからです。

次はコミュニケーションの相手です。誰とコミュニケーションしたのか、その行動は誰に対して起こったのかということを記録します。子どもによってはコミュニケーションの対象が偏っている場合があったりすることも少なくありません。家では、コミュニケーションの相手がお母さんばかりだったりすることがあるということです。

　次ぎに手段です。話した内容をどのような方法で伝えていたのでしょうか？それは、ことばだったのでしょうか？それともジェスチャーでしょうか？カードでしょうか？VOCAなどのコミュニケーションエイドでしょうか？それを具体的に記入していきます。

　備考の欄には，その他必要だと思われる情報を記入します。

少なくとも記録用紙3枚が埋まるくらいまで記録してみることが大切です。数回のコミュニケーション場面だけでは見えてこないことがあるからです。

2.2 整理

　次に、書き込まれた記録用紙を整理していきます。最終的にはグラフにしますが、その前にコミュニケーション記録整理表（用紙２）を使います。コミュニケーション記録表に記入されたものを一つ一つ整理していくのです。記録整理表には、記録表に記入された内容を数えてその回数を記録していきます。

　これをグラフにしたものが用紙3です。このようにグラフにすると，子どもの得意な面と不得意な面が表れているのがわかります。

　このようなグラフにすると，日頃子どもがどのような方法で、誰に対して、どのような場面でコミュニケーションをしているのかがわかってきます。

2.3 目標の設定（用紙３）

　グラフにすることができたら、コミュニケーションする際の目標を立てます。ここで忘れてはならないのは、子どもが得意なところを中心に考えるということです。子どもができていることを中心に考え，どこかに変化を加えるようにします。今まで、適切なコミュニケーション行動が身についていなかったために、伝わらなかった経験も多くしていると考えられる子どもたちのなかには、コミュニケーションすることを苦手としている子どももいるはずです。そのような子どもに対して、いろいろ要求しすぎたり、不適切だと思われるコミュニケーション行動だけをターゲットにして強制をしようとしたりしても、お互いにコミュニケーションすることが負担になるかもしれません。お互いに負担にならない楽しいコミュニケーションの方法を考えていくことが、長続きさせていくこつなのです。

　例えば、上記のグラフでいうならば、コミュニケーションの練習をする場面として、食事の場面を選びます。一番コミュニケーション行動が出ている場面だからです。そして、機能として、拒否を表現できるようにするということを目標にする場合を考えて見ましょう。この場合は拒否を出す対象は母親になります。相手はコミュニケーション行動がでやすい母親にするわけです。手段は，カードと音声の併用，サインと音声の併用ということになるでしょう。クレーンよりもより間接的な方法を使うようにします。「いや」というカードを作り、それを机上に置き、嫌いな食べ物が出たときに「いや」と表現させるために、そのカードを指さしたり、手渡したりしてもらうのです。「いや」という表現が出たら、そこで、嫌いなおかずを目の前で減らすようにします。「このくらいなら食べられるかなー」と交渉をするのです。

機能として、注意喚起を目標とするならば、食事の場面でお母さんに対し要求する前に「おかあさん」と注意喚起をする練習をするようにします。お母さんは名札などをつけておいてもよいかもしれません。それを指さしながら「お母さん」と呼びかける練習をするのです。その後、要求されたことをかなえるようにするわけです。

機能ではなく相手を変えたい場合は，食事の場面に，得意である要求を，お父さんにということになります。これは，クレーンでもいいかもしれません。父親にも積極的にコミュニケーションで切るようにしていくことが大切になるからです。父親に対してクレーンが十分に出るようになったら、そこで初めて手段をカードや音声に変えるというようにすればいいでしょう。そこで初めて、クレーンを間接的なコミュニケーション手段に変えていくわけです。

　このようにして目標を立ててコミュニケーションの指導を実践していくのです。

　さあ，チャレンジしてみましょう。子どもさんとのコミュニケーションするためのヒントが見えてくるかもしれません。きっとコミュニケーションすることが楽しくなるに違いありません。